

PRIME連続講座「東日本大震災と私たち」

第2回（4月21日）記録

文責 武井一真（明治学院大学国際学部 2011 年卒業）

明治学院大学国際平和研究所による連続講座「東日本大震災と私たち」は、大震災という非日常的経験を受け、様々な情報が飛び交う中で自らが考え行動していくために、人々が集い＜議論＞をする場として市民に開かれた講座である。第2回となる今回の講座は、映像ドキュメント.comの荒川さんをお招きして、まずチェルノブイリ原発事故の際のドキュメント映像を見たのち、グループ・全体での議論という形式で行われた。以下では、主に後半の議論において挙げられた様々な意見をまとめていきたい。

1. ドキュメント映像とその解説については、レジメが配られているため、そちらを参照していただきたい。

2. ディスカッション

ディスカッションでは、2つのトピックが提示され、それに関して議論を行うという形がとられた。2つのトピックは以下の通り。

①自動車がそうであるように、原発によって事故被害に遭う人よりも、恩恵を受ける人の方が多いのではないか。

②原発に反対するのであれば、そのエネルギーをどう代替していくのか。

①の問いに対しては、同意的・反対的という双方の性質をもつ意見がだされた。

a) 同意的な意見：

・「恩恵」とは、電力という意味のみでなく、軍事力転用可能な核エネルギー技術を持っていることを示すという点において、核抑止力という意味においても恩恵を受けているのではないか。

b) 反対的な意見：

・「被害を受ける地方 - 利益を得る都市部」という関係があるのではないか。そして問①は、この関係を度外視してしまっている。

・（経済的利益を代償に原発というリスクを背負っているのだから文句は言えないのはいかということと言われるが、）そもそも、経済的利益と命を同じ天秤にかけてよいのだろうか。

・一度事故が起きれば、事故被害は一部の人々にとどまらず、大規模なものになってしまう

う。例えば農家など食糧を生産する人々は、放射能汚染の有無にかかわらず風評被害とそれともなう収入の激減といった被害に遭う。その意味で、事故被害は甚大であり、被害者の絶対数の大小で原発の問題を考えるべきではない。

・事故被害にあう人というのは一部の人々ではない。風にはこぼれた放射能に被爆することなどを考えれば、被害に遭う人と恩恵を受ける人という二項に分けることすらできない。
・仮に被害を受ける一部の人々であるとしても、そもそも被害リスクを前提にして成り立つエネルギーに頼ってはいけなのではないか。

②の問いに対しては、主に以下の3つのタイプの意見が出された。

- a) 「安全性強化」論：大きな災害でもびくともしない原発施設を作るべきではないか。(→反論：それは今までもやってきたができなかった。)
- b) 「脱原発・代替エネルギー」論：水力・火力、環境面を考えるならば風力・太陽光などをより稼働させれば、原発がなくなっても電力を補えるのではないか。
- c) 「脱エネルギー依存社会」論：電力に頼りすぎてきた社会、生活の仕組みを変えていくべきではないか。(例：光を取り込みやすい建築、街など)

以上のような点がフロアのディスカッションを通して提示された。これを踏まえてさらに議論を深めていく際のポイントは、以下のような点ではないだろうか。

○どのレベルで「被害者」を捉えるのか：

問いかけ①に対するコメントとして「被害を受ける地方 - 利益を得る都市部」という図式が示されたが、誰が「被害者」かをめぐっては、複数のレベルの認識が存在している。PRIME 所員の高原孝生教授が指摘したように、風によって飛散する放射能の危険にさらされているのは、東北地方の人々だけでなく、日本全域と周辺国の人々にも及んでいるという意味では、今回の問題は「原発を進めてきた国家 - 情報隠蔽の結果として放射能被害に遭う人々」という図式で捉えることも可能である。この観点から議論を進めていけば、なぜ隠蔽があったのか、隠蔽が作り出される構造はなんなのかという事を明らかにしていくきっかけになることが期待できるだろう。

一方で、チェルノブイリの映像でも見られたように、このような災害・事故が起きた際に最も甚大な被害を受けているのは誰なのかという視点を採用した場合には、「すぐに逃げられる金持ち(大学教員・東電幹部など) - 危険を承知で残らねばならない貧乏人(農家・作業員など)」という図式で権力関係を捉える事も可能である。この観点から議論を進めた場合、階級的な格差が生命の危険にまで影響を及ぼしているという点で、現在の資本主義のあり方を問題視していくということがありうる。

一般的に、視点の違いによって、ひとつの事象の中から様々な問題点が見いだされると

ということがあるが、今回の原発事故はその規模・被害が大きいため現状の社会の問題点が（通常以上に）一気に露呈されたように思える。その分、議論をしようとした際にそれぞれの観点からの意見が錯綜して、逆に深い部分までの話し合いに至らないということが十分に起こり得る。よって、観点の違いをめぐって言い争いをするのでなく、いかにそれぞれの観点から現状の問題点を指摘できるかが重要であるという事を、共通の認識としていく必要があるのではないだろうか。

以上